

A 語句の意味

- (1) はなはだしい。すばらしい / 程度が並々でない
- (2) 並一通りだ。ふつうだ
- (3) (打消を伴って) まったく～ない / 呼応の副詞
- (4) きまりが悪い。みっともない

B 文法

- (5) 係り結び / 「こそ」+已然形
- (6) 丁寧語(補助動詞) / ～ております・～ます
- (7) 不可能(とても～できない)
- (8) 申す / 「なむ」+連体形
- (9) 「ざり」=打消 / 「つ」=完了
- (10) もとの形は「なるなり」。「な」は断定の助動詞「なり」の連体形「なる」が撥音便化して「ん」となり、その「ん」が表記されずに「な」となったもの。下の「なり」は伝聞推定の助動詞 / 定期テスト最頻出
- (11) 禁止(～するな・～してくれるな)

C 敬語と主語

- (12) 「参り」=謙譲語、参上する先の中宮定子への敬意(作者→定子)。主語は中納言(藤原隆家)
- (13) 「奉ら」=謙譲語。作者→中宮定子(扇を受け取る側)。「せたまふ」=二重尊敬(最高敬語)。作者→中納言(差し上げる動作の主体)
- (14) 「申し」=謙譲語。作者→中宮定子。「たまふ」=尊敬語。作者→中納言
- (15) 尊敬語(「言ふ」の尊敬)。作者→中納言への敬意。主語は中納言
- (16) 「きこえ」=謙譲語。作者→中納言(尋ねられる側)。「させたまへ」=二重尊敬。作者→中宮定子(尋ねる動作の主体)

D 口語訳

- (17) (中納言が中宮定子に) 御扇を差し上げなさる。
- (18) 隆家はすばらしい骨を手に入れております。
- (19) 並一通りの紙ではとても張ることができないので
- (20) くらげの(骨)でございましょう。

E 内容・記述（解答例）

(21) くらげには骨がないので、「見たこともない骨」ならくらげの骨だろう、としゃれたから。(三十九字)

(22) 訳＝「これは隆家が言ったことにしておもう。」／うまい切り返しに感心し、自分の手柄にしたいと思うほど面白がる気持ち。

(23) このようなことは、きまりの悪いことの中に入れてしまうべきだけれど、「一つも書き落とすな」と（人が）言うので、どうしようもない。

(24) 自慢に対し、骨のないくらげを持ち出して切り返した清少納言の機知。(三十字)

F 文学史

(25) (ア) 清少納言 (イ) 随筆 (ウ) 平安時代 (中期)

(26) をかし / 知的で明るい興味

(27) (ア) 源氏物語 (イ) 紫式部 (ウ) もののあはれ

【現代語訳（全文）】

中納言（隆家）が（中宮定子のもとに）参上なさって、御扇を差し上げなさるときに、「隆家はすばらしい骨を手に入れております。それに紙を張らせて差し上げようと思うのですが、並一通りの紙ではとても張ることができないので、（よい紙を）探しております。」と申し上げなさる。

（中宮定子が）「どのようなものか。」とお尋ね申し上げなさると、「すべてがすばらしゅうございます。『まったくまだ見たことのない骨のようすだ。』と人々が申します。本当にこれほどのものは見たことがありませんでした。」と、声高くおっしゃるので、（私は）「それでは、扇の骨ではなくて、くらげの骨でございましょう。」と申し上げたところ、（中納言は）「これは隆家が言ったことにしておもう。」とおっしゃって、お笑いになる。

このようなことは、きまりの悪いことの中に入れてしまうべきだけれど、「一つも書き落とすな。」と（人が）言うので、どうしようもない。